

〔論文〕

カンボジアにおける鶏と人間の関係

山 崎 寿美子

はじめに

1. 野鶏から家鶏へ

- 1-1 家禽化された鶏の祖先
- 1-2 実用か信仰か
- 1-3 身近な生き物としての鶏

2. カンボジアにおける鶏

- 2-1 鶏を飼う
- 2-2 鶏を食べる
- 2-3 家鴨との対比

3. 鶏と人間の関係

- 3-1 カンボジアの民俗から
- 3-2 カンボジア北東部の事例

おわりに

はじめに

「カンボジアの鶏は美味しい」。日本で暮らすカンボジア人と食事をするとき、こういう表現をよく耳にする。日本の肉厚の鶏を口にしながら物足りなさを感じ、カンボジアの骨ばった鶏の味に思いを馳せるのである。クメール語で鶏のことを「モアン」と呼ぶが、人々の認識に基づくと、カンボジアの鶏は大まかに2種類に分けられる。1つは、「モアン・スロ

ク（田舎の鶏）」あるいは「モアン・スラエ（水田の鶏）」と呼ばれる、農村部に暮らす人々が自分たちの屋敷地や田畑で飼育する鶏である。もう1つは、養鶏場で大量に飼育される鶏で、「モアン・カセカム（農業の鶏）」¹⁾と呼ばれる。こちらの鶏は、日本のスーパーで一般的に見られるような肉厚のものであり、肉は多いが味が薄い、薬品を使っているために害があるなどと考えられている。

カンボジアの鶏が美味しいと言うときは、「モアン・スロク」のことを指している。それは、骨と皮しかないほどに痩せて見えるが、屋敷地や田畑を歩き回って育つので、身が引き締まっている。飼料は飼主も食べている米が主で、「安全」である。人々の見解によれば、「モアン・スロク」こそ「自然な（トアムマチャット）」²⁾鶏であって、肉の少なさはさておき、骨まで味があって美味しいのだと言う。この話を聞いたときに私もカンボジアの鶏肉を思い出すのだが、「モアン・スロク」は骨まで味わい深く、柔らかい。鶏は、足の先から頭まで丸ごと調理され、余すところなく食べられるのである。

近年カンボジアは経済成長に伴って都市化が進み、首都や地方都市では、自家での養鶏

が減ってきた。そして、養鶏場で大量に生産された「モアン・カセカム」ばかりが市場で目立つようになった。「カンボジアの鶏は美味しい」と人々が語るのは、このように「モアン・カセカム」という「人工の」鶏が出回る状況において、従来は特別視されず当然のように育てられてきた「モアン・スロック」を、「自然の」鶏として意識化し、再評価している表れでもある。

このように、カンボジアの鶏は、食べて美味しいだけでなく、人々の嗜好や自然観、現地の社会変化などを考えるにも重要な存在である。またそれは、人々にとって身近な動物であるだけに、人間の生活においてさまざまな役割を与えられてきた。こうした鶏と人間の関係について、東南アジアの他地域においては既に調査研究がなされてきたが、カンボジアに関してはまとまった論考がない。日本と言うまでもなくカンボジアにおいても、鶏と人間の「顔の見える」関係が薄れていきつつある現在、人間の生活にとって鶏がどのように重要であり続けてきたのかについて記しておくことは、少なからず意味のある作業であろう。このような問題意識にたち、本稿では、カンボジアにおける鶏と人間の関係について若干の考察を試みたい。

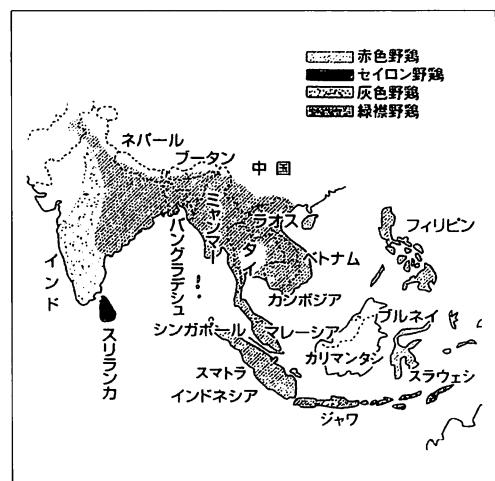
1. 野鶏から家鶏へ

1-1 家禽化された鶏の祖先

鶏は、人間によって飼い慣らされ、作り変えられてきた鳥で、厳密に言えば家鶏である。そのもとになった野生の鳥は野鶏と呼ばれ、家鶏の祖先にあたる。野鶏は複数種いるが、

興味深いことに、家禽化につながったのは、カンボジアを含む東南アジア大陸部に生息していた種であるとされている。家鶏の祖先や家禽化のプロセスについては、生物学や民族学分野で詳細な研究がなされているので、本節ではそれらの知見を参照し簡潔に述べるとどめたい。

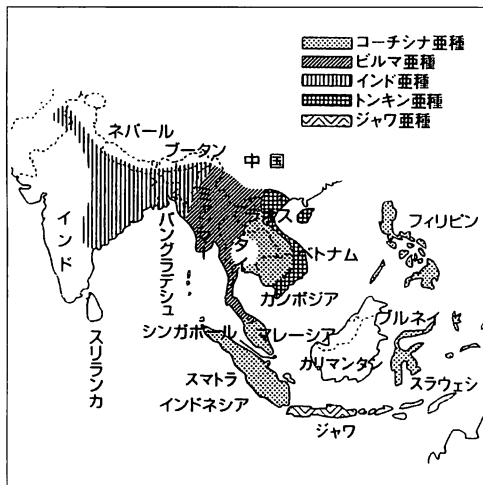
秋篠宮（2000）によると、野鶏には、赤色野鶏（*Gallus gallus*）、灰色野鶏（*Gallus sonerati*）、セイロン野鶏（*Gallus lafayettei*）、^{あおえり}緑襟野鶏（*Gallus varius*）の4種類がある。いずれも雉科に属するので外見は雉に似ており³⁾、南アジアから東南アジアにかけて分布している（図1）。それぞれを具体的にみると、赤色野鶏は、カシミール地方、インドシナ半島、マレー半島、スマトラ島、スラウェシ島、フィリピン諸島など、広範囲に生息する。その他の3種は範囲が限られ、灰色野鶏は、ゴダビリ川以南のインド半島中心、セイロン野鶏はスリランカ、緑襟野鶏はジャワ島と小スンダ列島である。



〔図1〕 野鶏の分布

出典〔秋篠宮2000：Ⅷ〕

これら4種類のうち、どの野鶏が家禽化にかかわったのかについては、進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの発表以来、論争があった。ダーウィンは1868年に、鶏と自由に交配して繁殖力ある雑種ができるのは赤色野鶏だけであるとして、家鶏の赤色野鶏起源説を打ち出した〔ダーウィン1938 (1868)〕。それに対して、ウィリアム・ティゲットメイヤーたちは、大後頭孔と呼ばれる後頭部にある孔の形状が、コーチンなどの肉用種と赤色野鶏とで異なることや、他の野鶏も鶏と交雑して繁殖可能な雑種を作りうることを挙げて反論した。その後も論争は続いたが、ダーウィンの説が優勢であり、秋篠宮が行なった系統解析によっても、家鶏が赤色野鶏を起源として発展していったこと、それも、赤色野鶏の中の亜種から作られたことが明らかになっている〔秋篠宮2000：52-55〕。



〔図2〕 赤色野鶏5亜種の分布

出典〔秋篠宮2000：50〕

赤色野鶏には、コーチシナ亜種、ビルマ亜種、インド亜種、トンキン亜種、ジャワ亜種

といった5つの亜種がいるとされる（図2）。現在までのところ、家鶏の祖先として有力なのは、このうちのコーチシナ亜種とビルマ亜種である。両者の区別は耳朵を見ると分かり、白い耳朵をもつのがコーチシナ亜種、赤い耳朵をもつのがビルマ亜種らしい。ただし、分布が重なったり近接していると分別しにくい場合もある。また、図2を見ると分かるように、コーチシナ亜種と言ってもその分布は広範囲にわたり、大陸部のタイ、ラオス、カンボジアからマラヤ半島、そして島嶼部のスマトラ島、スラウェシ島、フィリピン群島にまで及んでおり、一様ではない。そして、スマトラ島のコーチシナ亜種は家禽化に関与していないとされている〔秋篠宮2000：53-57〕。

カンボジアの野鶏については記述がないが、図1および図2を見ると、ラオス、タイ東北部とともにカンボジアにかけても、赤色野鶏コーチシナ亜種が分布している。上述の秋篠宮の分析によれば、タイのコーチシナ亜種が家禽化に関わった可能性が指摘されているが、「野鶏には国境がないので、その周辺域も含めて」〔秋篠宮2000：55〕と著者が述べているように、カンボジアも家鶏の祖先が生息していた地帯として考える。そして、それぞれの地域で家禽化が行なわれたのち、北上して中国に伝わり、家鶏として成立したとされている。

現在私たちが食用とする鶏卵や鶏肉のほとんどは、今から数千年から1万年前に人間によって飼い慣らされて以降、18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパで品種改良が進められた過程で作られた家鶏である。品種改良においては発育性と産卵性の高い品種が目指され、現在に至っている⁴⁾。白色レグホーン

や黄斑プリマスロックなどと東南アジアの野鶏とを結びつけるのに違和感を覚える方もいるかもしれない。しかし、野鶏を家禽化してきた東南アジアの人々の暮らしに照らしてみれば、私たちの生活様式ともつながっていることが良く分かる。庭先で家鶏を飼う習慣は、稲作文化と密接に結びついている。人間が主食とする米を鶏も食べ、農繁期には人間とともに鶏も水田に移動して養われ、さらには、豊作を願って水田の主に鶏が捧げられる。日本も東南アジアもこのような稲作文化圏であり、米を作りながら鶏を飼うといった生活様式において共通している。

米と鶏という組み合わせは、日本で米と並んで鶏卵も高い自給率を維持していることにも見て取れる。農林水産省の食料自給率の統計によると、1965年では米が95%、鶏卵が100%で、その後もあまり変動がなく、2018年の概算では米も鶏卵も共に97%である。鶏肉については、1965年時点で97%であったのに対し、1995年以降60%台にまで下がり、2018年も65%となっている〔農林水産省2017〕。このように鶏肉については輸入率が増加傾向にあるものの、米と鶏卵は依然として国内生産が9割以上を占めている。

1-2 実用か信仰か

鶏が野生種から生まれたことは前節で述べた通りであるが、人間がなぜ野鶏を家禽化したのかについては意見が分かれている。詳しくは秋篠宮（2000）を参照されたいが、食用利用が先か、信仰や占い、闘鶏などの文化的な関わりが先かで議論があった。現在は、食用目的というよりも文化的な関わり合いから飼養されるようになったという見解が多い

という。しかし、秋篠宮も述べているように、そもそも二者択一的に割り切れるのかという問題がある。食用にしる闘鶏や供儀にしる、必要に応じて狩猟すれば事足りるであろうし、ましてや食用ならば赤色野鶏よりも肉の多い種を飼うはずであろう。このような議論をふまえて彼は、家禽化がむしろ偶発的に進んでいったのではないかと述べている〔秋篠宮2000：69-70〕。

史資料がないためかその根拠については触れられていないが、人間と動物との偶然的な出会いという見解は、他の具体的な事例を思い起こせば一理あるとうなずけよう。鶏に限らず、思いもよらない偶然から、人間がある動物を食べ始めたり、それまでとは異なる形で利用したりする例は少なくない。たとえば日本の珍味として知られるくさやは、ももとは塩干魚として食べられていた。ところが、江戸時代に塩年貢の取り立てに窮した伊豆諸島の人々が、塩干魚を作る際に仕方なく同じ塩水を繰り返し使ったことで、魚の成分が溶け出て微生物が働き、独特の臭気を帯びるようになった。それに伴い、その塩水に漬けて作られる製品も強い臭いを持つようになったという〔藤井2002（2000）：38-40〕⁶⁾。つまり、くさは、やむにやまれぬ事情によって、人間が従来の塩干魚の作り方を部分的に変えたことで生まれたのである。もちろんこれは魚の食べ方の変化であって、魚は既に食利用されていたという点で、野鶏を家禽化するという段階と同列には扱えない。しかし、人間が他の生き物を捕えて利用するにあたって、偶発的な過程がいかに重要であるかを考える点では参考になる。

また、マレーシア、サラワク州のバラム川

中流域において、ヤマアラシと人間と油ヤシの偶然の出会いに関する次のような話もある。ヤマアラシは、かつてから木々に巣穴を作って森に住んでおり、それを人間が捕獲して食用としていた。ところが1970年代以降、人間が森を伐採して除草剤を散布し、油ヤシのプランテーションを作った。それにより、ヤマアラシは住処を追われ他所へ移動したのだが、数年後には、油ヤシの実を食べにやってくるようになった。もともとヤマアラシは胃石がしやすいとされていたが、油ヤシを食べることで胃石のできる割合が増えていった。すると、人間はその胃石に漢方薬としての効用を見だし、華人を中心に買い付けが盛んになり、マレー半島やシンガポールへ輸出する仲買人も現れた。このように、ヤマアラシ、油ヤシの実、人間の偶然の出会いによって、ヤマアラシの胃石が多く生みだされ、高値で消費されるようになったのである〔奥野2018：281-295〕。この例は、人間が動物の生活環境や植生に変化を与えたことで、思いがけず、ヤマアラシの胃石という新たな商品が消費されるようになったことを示している。

話を鶏に戻してさらにつけ加えるならば、少なくとも、食用と実用のどちらが先かという問いの設定は、昨今のカンボジア農村における養鶏のありかたに照らしても妥当とは考えにくい。鶏は、ト占、闘鶏、祖先や精霊との交信等に不可欠な生き物であると同時に、貴重な食料であり、必要に応じて交換財や貨幣の代わりにもなる。つまり、文脈によって鶏の位置づけが変化するのであって、どれか一つが先に立つものではない。次章で述べるように、飼い慣らす過程で、家鴨などと比較しつつ、人間が鶏に特別な価値を与えたから

こそ、食用のみならず、精霊や祖先への供儀や占いなど、多角的な利用がなされていったのではないだろうか。

1-3 身近な生き物としての鶏

このように鶏は、食用であれ文化的な目的であれ、人間によって飼養されるようになって久しい。そして、人間の生活圏に置かれるようになった鶏は、人間にとって身近な生き物になっていった。一番鶏と言うように鶏は夜明けとともに鳴くことから、夜の闇を退けて太陽を呼び寄せると考えられ、ヨーロッパでは魔除けの意味合いを込めて屋根に風見鶏がつけられることもある。

日本でも古くから鶏が人間の日常生活に深く関わってきている。たとえば、川端康成の小説「鶏と踊子」には、踊子の母が家で飼っている鶏が夜鳴きをしたというくだりが出てくる。鶏が夜鳴きをすると悪いことが起きると言う母に促され、踊子はその鶏を観音様の元に棄てに行く。ここには、飼育する鶏の習性から人間が吉凶を見定める様子がうかがえる。またその数日後に今度は雛鳥が夜鳴きをすると、それに対しては、「人間だって、子供は夜泣きしてもあたりまえ」だからと言って、放っておく。鶏の雛は人間の子供と重ねあわされ、その鳴き声も人間界で納得しうる出来事として対処されるのである〔川端1971：384-390〕。

現在でこそかなり珍しくなったが、日本でも昭和30年代から40年代を皮切りに企業養鶏が発展していくまでは、家の庭先で鶏が飼養されていた⁷⁾。民俗学的見地から写真で昭和の民衆生活を伝える須藤の編著（2007（1988））にも、人間の生活圏に鶏がいる様子

がみてとれる。たとえば、囲炉裏を囲む家族の後ろに鶏小屋が設置されている写真では、冬の寒い時期に居間を鶏と共有し、暖を取っている。それによって鶏は卵を産め、人間はその卵を食べられるわけである（写真1）⁸⁾。また当時は、生業に忙しい家族の中で、子供や年配者が鶏の飼育をする様子がみてとれる（写真2-1、2-2）⁹⁾。



（写真1）

中国雲南省のタイ族自治州、シップソーンパンナーに居住するタイ系民族の一つ、水タイ族では¹⁰⁾、成長段階によって鶏の呼称を区別することが知られている。鶏は一般的に「カイ」と呼ばれるが、秋篠宮が調査した轡典村においては、性別による区別のほかに、産卵前の雌鶏を「カイサーオ」、若い雄鶏を「カイバーオ」、大人の鶏を「カイローン」、年取った雄鶏を「カイプータオ」、年取った雌鶏を「カイミータオ」などと成長段階に応じて細かく呼称が分けられている〔秋篠宮・高田2000：97-98〕。動植物に対して細かな分類をする例は、鶏に限らず世界中どこにでも見られる。日本でも、成長すると異なる名前では呼ぶ出世魚や、米に対する呼称の多さ等がよく知られている¹¹⁾。それらに共通するのは、いずれも人間にとって身近な動植物であ



（写真2-1）



（写真2-2）

るという点である。水タイ族の鶏の例では、「サーオ（若い女性）」、「バーオ（若い男性）」、「タオ（年を取った）」など、人間の呼称に用いる表現が鶏の成長段階に応じてつけられており、鶏を人間の社会関係のなかに取り込んでいるかのようでもある。

このように、野鶏から家鶏へ移行した過程で、鶏と人間の間に、飼う／飼われる関係が定着し生活圏を共有するなかで、身近な生き物として、人間とのアナロジーで捉えたり、特性を知り尽くした人々による占いや神格化

が生まれてきた。ただし、身近でありはすれどもやはり人間とは異なる存在であるからこそ、人間の生活世界を占ったり神格化されたり、さらには食用ともなるのである。

本章では、野鶏が家禽化された過程について、先行研究を参照しながら概観してきた。以上をふまえつつ次章では、カンボジアに焦点を当て、農村部の家々における鶏の飼養と食べ方について簡単に紹介することから始めたい。

2. カンボジアにおける鶏

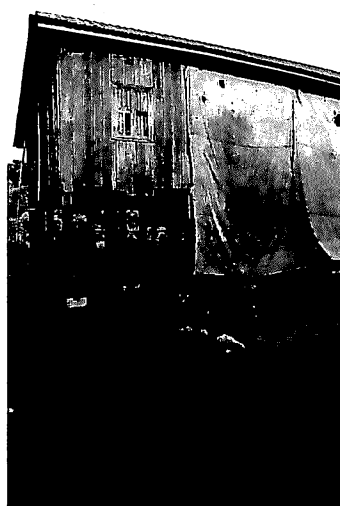
2-1 鶏を飼う

本稿の冒頭でも述べたように、現代カンボジアにおける養鶏事情は、おおまかに、各家での小規模な飼養と養鶏場での大規模な飼養とが併存している状態にある。養鶏場と言っても、生計手段の一つとして起業した個人経営が多く、組織化されていない。こちらの経営形態や飼養方法などについては未調査のため、今回は各家での飼養についてとりあげたい。

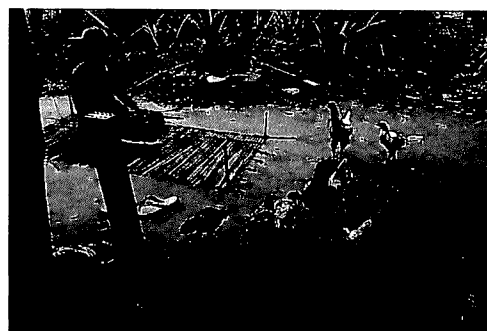
1-1で述べたように、カンボジアには、家鶏の祖先として有力視されている赤色野鶏のコーチシナ亜種が生息していたとされる。カンボジア北東部など少数民族が多く住む地域では、濃い赤茶色をした小ぶり（20cm前後）の鶏が見られ、首都近郊や都市部などクメール人の居住する地域では、白あるいは薄い茶色で比較的大柄（30～40cm前後）のをよく見かけるなど、民族や地域によって、好まれる種類も異なるようである¹²⁾。とはいえ、今日では多様な種が混ざり合い、在来種を特

定するのは困難であるし、人間も移住や他民族との通婚などによって民族が混ざり合うなかで、飼育する鶏の地域差も薄れつつある。

鶏の飼育方法は、放し飼いが一般的である。ケージを使う場合でも、雛は親元を離れないので、親鶏だけをケージに入れ、竹を編んだ隙間から雛が出入りできるようになっている。カンボジアの家屋は、都市部を除くと、高床式になっており、日中、鶏はその床下や、それに続く庭を、自由に歩き回っている（写真3-1, 3-2）。餌を探して地面をつついたり、高床の台所に上がってきてはこっそり鍋の中を



(写真3-1)



(写真3-2)

つついたりして人間に追い払われたりもする。床下には、鶏の他に、家鴨や犬なども飼われ、生活空間を共有している。夜間は、止まり木や、飼い主が用意した寝場所に入って眠る。また、雌鶏のために産所も準備されていることが多い（写真4-1, 4-2）。



（写真4-1）



（写真4-2）

飼育目的は、主に、自家消費と販売である。生活圏の自然環境によっても異なるので一概には言えないが、一般的に、自家消費といっても毎日の食事に頻繁にあがるのではなく、結婚式や葬式などのハレの日や、祖先や精霊

に捧げる機会、来客をもてなす場合などに屠られ、食べられる。販売は、成長した親鶏を村内外で売るのが、定期的というよりは、病気治療などのために現金が必要、仲買業者が買い付けに来た、村人から販売を打診されたなど、その時に応じて決める場合が多い。しかし、養鶏はさほど手間をかけずに雛を増やせ、恰好の収入源になるので、近年では、自家消費よりも販売目的で飼い始めることが多くなっている。

飼料は主に米で、1日に1～2回程度、床下や庭に撒かれる。人間が米を炊く前に、箆に米を入れて選り分ける際に出る碎米などを、ざっと地面に落として鶏に与える光景も良く見かける。人間が食べきれずに残った冷や飯を与えることもある。また、放し飼いであるため、日中は動きまわって植物や虫をついばんでいる。このように、自家での養鶏は、市販の飼料を買わずに済むので費用がさほどかからないことも、手頃な現金収入源として好まれる理由の一つであろう。

2-2 鶏を食べる

カンボジアはメコン水系に恵まれ、淡水魚が豊富であるため、魚食文化が発達している。日常的に食されるのも魚が多く、動物性タンパク質摂取の約75%を水産物によってまかなっているとされている [Ahmed et al. 1998]。したがって、都市部で切り売りされた肉や出来合いの料理を購入する場合はとにかく、鶏肉の摂取はそれほど頻繁ではなく、ましてや自家で飼う鶏を屠って食べる機会に限られている。

鶏肉を食べる機会として、たとえば、結婚式や葬式などのハレの日があげられる。しか

し、近年では、人々の生活圏の広がりから、饗宴に招く客や弔問客の数が増えており、市場などで購入した鶏を調理するケースが多くなっている。とは言え、突然の来客や酒宴など、急に客をもてなす場合には自家の鶏が重宝する。また、祖先や土地の守護霊などに願い事をする際にも鶏が捧げられる（後述）。

食べ方は多くあるが、大まかに、汁気のあつもの（スープ）とないもの（炒め物、揚げ物、素焼きなど）に分けられ、前者は、バナナの花房を加えた鶏肉の酸味スープなど、後者は、「熱い炒め物」と言われる、香辛料と唐辛子をたっぷり加えて炒めた料理や、千切りにした新ショウガと炒め合わせた料理などがある。

2-3 家鴨との対比

人間の生活における鶏の重要性は、同じく家畜として屋敷地で飼われる家鴨と比較しても明らかである。家鴨と鶏とは人々の捉え方に違いがあり、一般的に、家鴨よりも鶏のほうが良いイメージを持たれている。たとえば子育てについて、鶏は子育て上手なのに対し、家鴨は放任主義と考えられている。家鴨は卵が孵化した後は雛の世話をほとんどしない。一方の鶏は、雛を腹部の下に潜り込ませたり（写真5）、敵を威嚇するなどして、雛の身を守ったり、親の大きさほどに成長しても傍を離れない。カンボジアでは、このような鶏の習性を取り、子供の世話が上手な人間の母親のことを、「鶏の母」と呼んで褒めることすらある。

また、コンポンチャム州という一地域の農村で、次のような話を聞いたことがある。鶏は、卵を産むと、毎日その数を確認する。鶏は、



（写真5）

地面に寝る家鴨と違って、寝床を必要とするため、人間が高所に竹製の籠などで用意し、それを産所としても用いる。日中は外を歩きまわり、夕方になると戻ってくる。その時に卵の確認をするのだが、数が減っていることに気がつくと、せっかく産んだ卵が敵に捕られてしまったと悲しみ、その場所に戻ってこなくなる。そのため、人間がそこに家鴨の卵を加えて数を合わせておく。時には人間が鶏卵をそっと取り出して食べてしまうこともあり、そうした場合も数合わせすべく家鴨の卵を置いておく。すると、鶏の雛に交じって家鴨の雛も生まれてくる。鶏の親は、その家鴨も自分の雛と同じように育てるが、家鴨は水場が好きなので、池を見つけると水に入ってしまう。それをみた親は心配するが、鶏は水に入らないので、周りをぐるぐる回っているのだという。このように微笑ましく語られるエピソードにも、人間が鶏に向ける温かいまなざしと、鶏への畏敬の念が込められている。

また、人間の名前にも、鶏と家鴨への認識の違いが見られる。一般的に、東南アジア大陸部に暮らしているタイ系諸民族の間では、戸籍に登録される本名とは別に、あだ名があ

り、日常的に用いられている。あだ名は、美しすぎると名前で悪霊を引き付けてしまうので、敢えてあまり美しくない物や動物名などからつけられる。家鴨と鶏について言えば、家鴨というあだ名は多くみかけるが、鶏は私の知る限りでは聞いたことがない。

さらには、家鴨が家屋のある程度の高さまで飛ぶと災いが起こると考えられ、お祓いの儀礼がなされることすらある。家鴨を飼う際には、飛ばないように予め羽の一部を断っておくのだが、それが間に合わずに飛んでしまうと、不吉だと言って村人たちが慌てて儀礼の準備をすることになる。このように、一つ屋根の下で暮らしていても、鶏と家鴨では捉えられ方が異なる。

3. 鶏と人間の関係

3-1 カンボジアの民俗から

カンボジアの人々は、飼い慣らしながら、食べながら、鶏に様々な価値を見出してきた。たとえば、カンボジアの民俗が詳細に記されている『クメール・ルネサンス』を紐解くと、鶏が人間の生活に深く関わっていることが見て取れる。

たとえば、第5巻2-35話に、こんな話がある。シェムリアップ州では、赤ん坊の頭に腫物ができて医薬では治らない場合、民間治療師に原因を占ってもらったうえで、「モアン・チュラエツ」と呼ばれる鶏を治療に用いるという。チュラエツの意味は不明だが、別名「モアン・クロニャッ（毛がボサボサの鶏）」とも呼ばれており、その名の通り、体毛と羽がボサボサで毛羽立っている。珍しい鶏だが、

治療のために探してくる。病気の子が女性であれば雄を、男性であれば雌を準備する。それは、病人と鶏が夫婦になることが意図されているという。治療の方法は、鶏を病人の頭の上にかざしながら、上から水をかけ、その水が病人の頭にもかかるようにする。鶏を袋にいれて水をかけ、その水を取り出して病人にかける場合もある。いずれの場合も、水をかけながら願い事をつぶやく。基本的にそれで儀礼は終わりだが、なかには、その鶏の羽を少々とって布で巻き、ネックレスのように当事者の子供の首にかけておくこともある [Ang et al. (eds) 2009-2010 : 24-25]。

以上は、人間の病を鎮めるために鶏が必要とされる例であったが、第8巻2-49話には、鶏を用いて霊をだます例が記されている。コンボントム州のソンボー村では、村人たちが祭りを楽しむ際、成仏できずに腹を空かせて徘徊している霊に対して、生者に悪さをしないよう村から遠ざける儀礼を行っていた。竹で作った動物（馬、象など）の背に、米飯とおかずをいれた供物を載せて、列になるよう並べ、村の外へ導く。その際、最後尾に、「モアン・チュカーン（串に刺した鶏、磔になった鶏）」と呼ばれる鶏も置く。それは、生贄ではなく、供物がいかに立派であるかを霊に見せびらかすためであるという。というのも、モアン・チュカーンは、肉を取り除いて、はぎ取った毛皮の部分だけだからである。破れないよう慎重に毛皮をはいで、肉は人間が食べ、毛皮だけを竹軸に広げ、まるで鶏が羽を広げて立っているかのようにして置く。こんなに豪華な食べ物があるぞと、霊を騙すわけである [Ang et al. (eds) 2012-2013 : 32-36]。

これらの例からは、鶏に、人間の身体の状態や霊との交渉をスムーズにするという期待がかけられているのが見て取れる。

3-2 カンボジア北東部の事例

私の調査地であるストウントラエン州でも、病気の治療、精霊への報告や願い事、占いなど、さまざまな場面で鶏が必要とされる。

たとえば、鶏卵を用いて病気を鎮めることがある。3-1の事例と同様に、医薬や薬草を用いた治療でも効果がないといった場合に、当事者が民間治療師のもとに行き、対応を仰ぐ。民間治療師は、患者の患部に息を吹きかけ呪文を唱えたり、米、タバコ、ビンロウジ、蠟燭、酒などとともに鶏卵を準備し、鶏卵を病人の幹部に当てて転がす。そうすることで病気が快方に向かうものと信じられている(写真6)。



(写真6)

また、鶏は、祖先や自然界の精霊に対して報告や願い事をする際にも不可欠とされている。たとえば、ストウントラエン州の村落で

は、水稲耕作が主な生業の一つであるが、耕起、田植え、脱穀などの節目ごとに水田の守護霊に鶏が捧げられる。熱帯モンスーン気候に属するカンボジアは、例年、新年（西暦の4月）を迎えたあと、5月頃から雨が降り始め、雨季に入る。村人は、雨の降り具合を見ながら、田起こしにとりかかるのだが、その際、田起こしを担う水牛や牛の無事を祈って、土地の守護霊に働きかける。自家の鶏を屠って茹で、ご飯と酒とともに樹下に置き、「今年もこれから田起こしをして稲作を始めます。どうか私たちの水牛が、何事もなく元気で田起こしを行なえますように。悪さをしないでくださいね」などと願い事を告げるのである(写真7-1, 7-2)。そして、田起こし、苗代づくりに播種、田植えと順調に作業を進め、8



(写真7-1)



(写真7-2)

月の中頃に田植えが終了すると、田の主はその報告をし、豊作を願う。その際にも、樹下で、米飯、酒、甘味、線香、蠟燭などとともに、丸ごと茹でた鶏が捧げられる（写真8）。なお、こうした供儀においては、先代が鶏を捧げたのであれば鶏と決められており、別のもの（豚や牛など）を捧げると精霊が怒って災いをもたらすと信じられている（稲作サイクルと儀礼については表1を参照）。



（写真8）

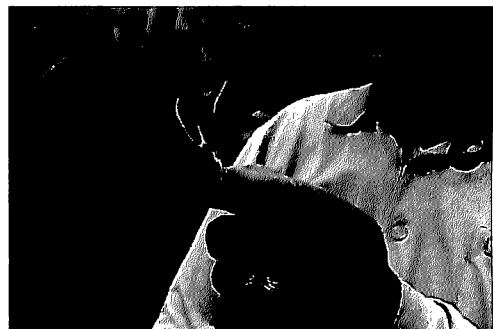
〔表1〕 ストゥントラエン州シェムボーク郡KS村における稲作サイクル

季節	乾季					雨季					乾季		
	寒季		暑季			雨安居					寒季		
西暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
ラオ歴	duan nyii	duan 3	duan 4	duan 5	duan 6	duan 7	duan 8	duan 9	duan 10	duan 11	duan 12	duan ciang	
水稲 稲作	<div> <div>← 耕起</div> <div>← 畦代播種</div> <div>← 田植</div> <div>← 刈入</div> <div>← 脱穀・貯蔵</div> </div>												
儀礼	<div> <div>● 水牛への儀礼</div> <div>● 耕起儀礼</div> <div>● 田植儀礼</div> <div>● 田植終了儀礼</div> <div>● 脱穀儀礼</div> <div>● 稲魂搬入</div> </div>												
陸稲	<div> <div>← 火入れ</div> <div>← 播種</div> <div>← 除草</div> <div>← 刈入</div> <div>← 脱穀・貯蔵</div> </div>												

〔山崎2018：89〕より転載

このように鶏を精霊に捧げるとき、茹でた鶏の首の腱（「カーン・カイ」）を取り出して、吉兆を占うこともある。3つの突起が全て同じ方向に向いていると、良い兆候の表れであるという（写真9）。この占いは、稲作に限らず、家の新築などにおいてもなされ、東北タイのラオ村落でも見られる〔Sparks 2005：48〕。

また、鶏卵を用いた占いもある。たとえば、村で死者が出ると、火葬する場所を決めるために、その能力を持った師が鶏卵を持って村の外れに行き、鶏卵を投げる。それが割れなければ、その場所は火葬に適さないとされ、



（写真9）

別所に移る。そして鶏卵が割れたところを火葬場に決める（写真10）。



(写真10)

さらには、人間に赤ん坊が生まれると、雌鶏を1羽選び、足首に木綿糸を結びつけ、その赤ん坊の魂として成長を見守ることもある(写真11)。このように鶏と人間の子供を結びつけるのは、1-3で取り上げた日本の小説で、夜鳴きする雛鶏が人間の子供と重ね合わせて語られていたことと似ている。



(写真11)

以上、本章で記述した諸例からは、カンボジアにおいて、鶏の存在やその身体の一部(卵、腱など)を用いて、人間の身体の状態を良い方向に転じたり、人間が計り知れない事象を占ったり、目に見えず直接働きかけることのできない霊に働きかけようとしていることが分かる。

おわりに

本稿では、まず、カンボジアの地方村落の庭先で飼われる鶏が美味しいというエピソードから始め、現在の家鶏のルーツがカンボジアを含む東南アジア大陸部にあるとされていることを概観した。そのうえで、家禽化され人間の生活圏で共に暮らす中で、どのように鶏が身近な生き物として捉えられ、扱われているのかを、具体的な例を通して記述してきた。

日本が歩んだ道と同じように、カンボジアでも現在は都市化によって、養鶏場で大量飼育される鶏が増えてはいる。地方村落における自家での養鶏も、緊急時の現金収入源として期待されることが多くなってきた。しかしそうした中でも、鶏とのかかわりがなくなったわけではない。それは、本稿で紹介したいいくつかの民間信仰からも見て取れる。人々は、生業、誕生や死といったライフサイクルの節目などに、霊に対して鶏を捧げ、願い事をする。痩せてはいるが骨まで美味しいがゆえに、人間だけでなく、祖霊や土地の守護霊など、自然界の霊も好む御馳走となるのかもしれない。また、火葬場の選定や、作物の豊穰、新築家屋の吉兆などをみる際に、鶏の卵や首の腱を用いる事例からは、人間だけでは確信のもてない事柄に対して、鶏に方向性を委ねていることを示していよう。

＜参考文献＞

- 秋篠宮文仁 2000 「鶏一家禽化のプロセス」『鶏と人－民族生物学の視点から』（秋篠宮文仁編著）小学館、pp.47-78
- 秋篠宮文仁・高田勝 2000 「家鶏と村人の生活」『鶏と人－民族生物学の視点から』（秋篠宮文仁編著）小学館、pp.79-108
- 秋道智彌 2000 「鶏占いと儀礼の世界」『鶏と人－民族生物学の視点から』（秋篠宮文仁編著）小学館、pp.139-166
- 秋道智彌 2017 『魚と人の文明論』臨川書店。
- Ahmad, Mahfuzuddin, Hap, Navy, Ly, Vuthy and Tiongco, Marites 1998 *Socioeconomic Assessment of Freshwater Capture Fisheries in Cambodia: Report on a Household Survey*. Mekong River Commision.
- Ang Cuulian, Praop Canmara, Siiyon Supiaret, Kong Vireah (eds) 2009-2010
 កម្រងអត្ថបទក្នុងបណ្ណាញព័ត៌មានវប្បធម៌ខ្មែរ
 (Khmer Renaissance) vol.5 FOKCI (Friend of Khmer Culture, Inc.)
- Ang Cuulian, Praop Canmara, Siiyon Supiaret, Kong Vireah (eds) 2012-2013
 កម្រងអត្ថបទក្នុងបណ្ណាញព័ត៌មានវប្បធម៌ខ្មែរ
 (Khmer Renaissance) vol.8 FOKCI (Friend of Khmer Culture, Inc.)
- 奥野克己 2018 『ありがとうもごめんなさいもない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』亜紀書房。
- 川端康成 1971 「鶏と踊り子」『掌の小説』新潮文庫、pp.384-390
- 須藤功編 2007 (1988) 『写真でみる日本生活図引4 すまう 新装版』弘文堂
- Sparkes, Stephen 2005 *Spirits and Souls: Gender and Cosmology in an Isan Village in Northeast Thailand*. White Lotus.
- ダーウィン、チャールズ 1938 (1868) 『ダーウィン全集IV 家畜・栽培植物の変異 上』（永野為武・篠遠喜人共訳）白揚社。
- 中尾佐助 1972 『料理の起源』NHKブックス。
- 長島弘道 1969 「戦後養鶏業地域の発展と経営形態」『地理学評論』42 (1) 60-75
- 農林水産省 2017 『食料自給表平成28年度』農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室。
- Harris, D.R. 1996 Domesticatory relationships of

- people, plants and animals. Ellen, R. & Fukui, K. (eds.) *Redefining Nature*. BERG. pp.437-463.
- フェルド、スティーブン 1992 『鳥になった少年』（山口修・山田陽一・ト田隆嗣・藤田隆則訳）平凡社。
- 藤井建夫 2002 (2000) 『魚の発酵食品』成山堂書店。
- 山崎寿美子 2014 「ビンロウジ噛みの鳥型はさみ」TASC MONTHLY 459 : 14-21
- 山崎寿美子 2018 『カンボジア北東部のラオ村落における対人関係の民族誌－もめごとへの間接的な対処法』めこん

引用文献

- 1) 「カセカム」は農業を意味するが、ここでは、工場等で作られた飼料で飼われるという意味合いが含まれている。
- 2) 「トアムマチャット」は自然、天然などと訳され、様々な文脈で用いられる。たとえば、近年、化学薬品や化学肥料を用いた農産物が多く出回るようになっており、それとの対比で、従来通りの農法で、牛や水牛の糞などを肥料として育てた農作物を、「自然の（トアムマチャット）」農作物として高く評価する傾向がみられる。
- 3) ここでいう科とは、「分類学の父」として知られるスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネによって確立された生物の分類体系に基づく。18世紀にリンネは、あらゆる生物を、上記から界、門、綱、目、科、属、種に分類し階層化した。またそれぞれに下位分類や、品種のように人為的に創られたものがある。それに従えば、たとえば赤色野鶏は、動物界、脊椎動物門、鳥綱、鶉鷄目、雉科、鶏属、赤色野鶏となる [秋篠宮 2000 : 49]。
- 4) 照葉樹林文化論を提唱したことで有名な植物学者、中尾佐助は、『料理の起源』で鶏の卵と肉が食用になった歴史について触れている。人間による管理が未発達な状態では、鶏の産卵数は年間20～40個で、野生の鳥としてはそれが十分な数であるという。それに対して品種改良された鶏の場合には、年間約300個もの卵を産むとされる。また鶏肉の大量生産については、その大規模な卵生産に伴って問題

となる、卵を産まなくなった鶏の処理に始まり、より良い品質を求めて、ブロイラーと呼ばれる若鶏の生産に至ったのである。中尾は、こうした鶏卵と鶏肉の供給産業が、ラジオやテレビより新しい技術的成果によるものであると述べている〔中尾1972：133-134〕。

- 5) この議論はもちろん鶏に限らない。牛をはじめ動物を家畜化するに至るまでの動物利用のモデルについて、秋篠宮はデイビッド・ハリスの説をあげて詳細に説明している〔秋篠宮2000：66-68〕。ハリスによれば、食用として野生動物を捕獲した段階に始まり、徐々に群れを管理したりと囲い込みを行なうようになり、そののちに、家畜化が行なわれるようになったという〔Harris 1996〕。
- 6) くさは、伊豆諸島で作られる魚の干物の一種で、独特の臭いと風味を持つ。現在でこそ珍味として高値で売買されているが、明治末期には、「ショッチルボシ（塩汁干し）」と呼ばれて普通の干物よりも安く売られていたり、紡績工場の女工の給食に出されるなど、低級の干物として扱われていた〔藤井2002（2000）：40〕。
- 7) 戦後の企業養鶏の発展については、長島（1969）を参照されたい。
- 8) 昭和32年1月、新潟県東頸城郡松之山町天水越にて、中俣正義撮影〔須藤2007（1988）：48〕
- 9) 昭和29年8月、新潟県南魚沼郡六日町欠之上にて、中俣正義撮影、昭和31年7月、長野県下伊那郡阿智村にて、熊谷元一撮影〔須藤2007（1988）：82〕
- 10) 水タイ族は、タイ・ルー族と同じとする説もあるが、タイ系諸民族の分類は、地域ごとに自称と他称が異なるケースが多く、定かでない。ここでは、秋篠宮・高田（2000）に倣って水タイ族と記す。水タイ族はかつて景洪を中心に王国を築き、ラーンサーン王朝やラーンナー王朝と密接な結びつきがあったとされる〔秋篠宮・高田2000：89〕。
- 11) 注3で取り上げた自然科学的な分類に対して、このように文化によって独自の基準で分類する体系は、民俗分類（フォーク・タクソノミー）と呼ばれる。自分たちの生活環境にいる生物を独自の論理と思考様式により名づけ、分け

るのである。たとえば秋道は、日本を含めアジア・オセアニアにおける魚の民俗分類について詳細に紹介している〔秋道2017：31-60〕。また、スティーブン・フェルドは、ニューギニア高地民のカルリ社会において、鳥が鳴き声によって分類されることを明らかにした〔フェルド1992〕。

- 12) クメール人は白い肌を好む傾向がある。人間の皮膚はもちろん、たとえば家畜の牛も白色が多く、バンテアイミエンチェイ州の一村では、もっと綺麗な白にするために、洗車をするがごとく、牛を洗いに出したという話も聞いたことがある。